

中学校運動部活動における 外部指導員と顧問教諭の連携の在り方に関する実践的研究

内藤 真登（上越教育大学大学院）

I 緒言

近年の教育的ニーズの多様化に伴い、教諭の業務が複雑化・多様化し、運動部活動の担当は顧問教諭の多忙要因とされている。このような問題を解決するため、文部科学省は「学校における働き方に関する緊急対策」（平成29年4月）を発表し、外部人材の活用等による適切な部活動の在り方を示している。一方、外部指導員等が部活動に参加する際の在り方や顧問教諭の負担軽減について実践的に検討することも重要な課題であろう。本研究では、外部指導員が部活動へ参加する際の支援の在り方を明らかにすることを目的とし、外部指導員の参加が顧問教諭へ及ぼす影響について実践的に検討した。

II 研究内容

1. 対象：新潟県J市立J中学校剣道部顧問（剣道の経験あり）及び外部指導員（大学院生 剣道の経験あり）を対象とした。部活動参加の期間は約1年半、頻度は週1～2回であった。

2. 分析内容・方法と検討項目：本研究では、顧問教諭への半構造化インタビューの結果及び外部指導員の実践記録の自由記述内容を分析の対象とした。インタビュー内容及び自由記述内容は、Grounded Theory Approachに基づき、逐語録を作成し、文脈に基づいて意味のある内容ごとに切片化した。切片化したものをラベル化し、更に共通性のあるラベルをカテゴリー化【 】した。また、抽出したカテゴリーを用いてストーリーラインを作成し、外部指導員の参加が顧問教諭へ及ぼす影響について考察した。

III 結果と考察

本研究において得られたストーリーラインは以下の通りである。

「顧問教諭は、部活動の指導ができない場合に指

導員が【顧問教諭不在時の指導】にあたってくれたことで生徒指導などの【学校業務対応の実現】がなされた。外部指導員の【生徒への指導】は、顧問が教えられない点が身についたなどの【生徒の意識・技能の向上】という成果が得られた。また、外部指導員は【顧問教諭へのカウンセリング】を行っていた。それにより、練習メニューの幅が増えるなどの【顧問教諭の専門性の向上】や、指導方針や練習計画についての【顧問教諭の悩みの解消】がなされたと考えられる。外部指導員は、指導方針などの【情報共有】を行っていたことが、生徒の実態を確認でき、【生徒の意識・技能の向上】に繋がったと考えられる。また、外部指導員は、生徒が目標とする結果を出せなかった場合に、自分に責任があると【指導責任の引き受け】を行っていた。生徒の技術向上の責任は、以前まで顧問教諭が全て引き受けていたものであったが、外部指導員の参加によって【指導責任の分有】がなされたと考えられる。更に外部指導員は顧問教諭と保護者の関係について第三者として【保護者の意見の受け止め】をし、両者の意見を部活動運営に反映させようとした。それにより、【保護者との関係調整】の役割を果たしたと考えられる。」

IV 総括

外部指導員の役割は、部活動における技術指導だけでなく、保護者との関係調整、顧問教諭のカウンセリングの役割も果たしていた。このことから、外部指導員は部活動におけるコーディネーター的役割を担っているといえる。外部指導員の前提として、技術指導が顧問と外部指導員の立場の逆転といった問題の発生を避けること、顧問教諭の「補助者」という認識の上で部活動に参加することが重要だと考える。